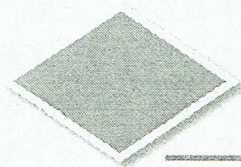




横須賀市の学力向上に向けた目標指標について

本市における学力向上の目標指標について



本市における学力向上の目標指標について

1 学力向上において目指すべきこと

本市では、学力向上の全体計画において、「横須賀市のすべての児童生徒に『確かな学力』の育成を図る」ことを最終的なゴールと定めています。「確かな学力」を育成することによって、児童生徒の可能性を広げ、横須賀の子ども像である「人間性豊かな子ども」の実現につながると捉えています。

その上で、確かな学力の育成を図る上での具体的な取組を次のように定めています。

横須賀のすべての児童生徒に「確かな学力」の育成を図る

- ◆「基礎的・基本的な知識・技能」の定着（習得）
- ◆知識・技能を活用して課題を解決するために必要な「思考力」「判断力」「表現力」等の育成
- ◆主体的な学習態度の育成

2 成果目標について

この具体的取組を通して「確かな学力」の育成を図る上で、その実現に向けた成果目標として、教育振興基本計画第2期実施計画に基づき、次のように設定しています。

<成果目標>

- (1) 児童生徒の学習意欲が向上している。
- (2) 『全国学力・学習状況調査』の結果が全国平均値を上回っている。

「確かな学力」の育成を図るための具体的な取組における主体的な学習態度の育成が実現できているかを測るために、(1)の「児童生徒の学習意欲が向上している」を成果目標としています。

また、全国学力・学習状況調査は国語、算数／数学でA問題、B問題に分かれており、A問題は身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能など（主として「知識」に関する問題）が中心となっています。B問題は知識・技能等を実生活の様々な場

面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力などに関わる内容（主として「活用」に関する問題）が中心となっています。そのため、(2)の『全国学力・学習状況調査』の結果が全国平均値を上回っている」を成果目標として、「確かな学力」の育成を図る具体的な取組の『基礎的・基本的な知識・技能』の定着（習得）」と『知識・技能を活用して課題を解決するために必要な『思考力』『判断力』『表現力』等の育成』の実現を判断していきます。

3 成果目標に対する目標指標及び基準

(1) 「児童生徒の学習意欲が向上している」の目標指標

『横須賀市学習状況調査』（小5・中2）の質問紙の*「学習意欲」に関わる質問の肯定的回答の割合が基準値より上昇している。

*「学習意欲」に関わる質問：「勉強することは楽しいですか。」

<参考> 基準値（平成26年度の肯定的回答の割合）

年度	小学校	中学校
平成26年度	60.4%	33.1%

(2) 『全国学力・学習状況調査』の結果が全国平均値を上回っている」の目標指標

『全国学力・学習状況調査』における調査対象教科の合計正答率において、本市平均正答率が全国平均正答率よりも、小学校は1.0ポイント、中学校は2.0ポイント上回っている。

<参考>

年度	小学校	中学校
平成25年度	-5.6ポイント	-1.2ポイント

本成果目標は、『横須賀市教育振興基本計画
第2期実施計画(平成26年度～平成29年度)』
における成果目標と同様

平成29年度において、上述した目標指標をもとに、その達成すべき基準を満たすことによって、成果目標が実現したとします。



学力向上に向けた各学校 の取組について

学力向上に向けた学校が取り組むべき3つの提言

(1) 提言1 学力向上に向けた課題解決のために、

教育課程を編成し、組織的に取り組みます。

(2) 提言2 指導力の向上を図るために、

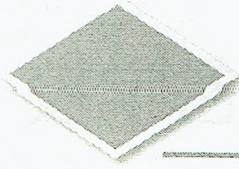
校内研究を充実させます。

(3) 提言3 学習内容を定着させるために、

目標と指導と評価が一体となった授業づくりを行います。

(4) 提言の関係性

(5) 「確かな学力」を育成するための授業づくりの視点



学力向上に向けた学校が取り組むべき新たな3つの提言

学校が取り組むべき新たな3つの提言

提言1 学力向上に向けた課題解決のために、教育課程を編成し、組織的に取り組みます。

提言2 指導力の向上を図るために、校内研究を充実させます。

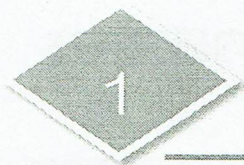
提言3 学習内容を定着させるために、目標と指導と評価が一体となった授業づくりを行います。

平成27年度の学力向上推進委員会では、「確かな学力を育成するための10の提言」（以下10の提言）の検証が行われました。検証の中で、提言が、学校、家庭、地域の3者を対象としているということ、また、その内容についても多岐にわたっているということから、提言に対して取り組むべきことが明確となっていないという実態が明らかとなりました。そのため、提言を焦点化する必要があるという意見を踏まえ、新たな提言では、学校が取り組むべき提言に絞るとともに、学校が提言を主体的に捉えられるような表現としました。

10の提言における学校に向けた提言を検証する中で、学力向上において成果のある学校では、「自校の課題を明らかにし、学力向上に向けた学校体制が確立していること」「校内研究体制が確立し、協議会を工夫し、授業改善につなげる等、校内研究が充実していること」が特徴として明らかとなりました。新たな提言1、2については、その成果があった学校の特徴を踏まえた取組を視点として提言としました。

また、経験年数の少ない教員が増える中で、学習指導要領の求める指導内容やつけるべき力の捉え方に課題があり、目標と指導と評価が一体となった授業づくりが必要であると捉えました。新たな提言3は、その課題を解決する視点から提言として設定しています。

また、提言の関係性について、次ページのように示しています。



提言1 学力向上に向けた課題解決のために、教育課程を編成し、組織的に取り組みます。

①提言設定の理由：

「確かな学力を育む10の提言」（以下「10の提言」）の検証結果から、学力向上に成果のあった学校の特色として、「学力向上に組織的に取り組んでいること」、「学力向上の目標について数値を含め明確化し、目標実現のための取組が具体的であること」が明らかとなりました。一方で、学力向上に向けた組織やPDCAサイクル、教育課程の編成については、市内学校において定着しつつも、十分とは言えない状況にあります。

各学校においては授業日数が増え、その授業時数をどう活用していくかという、教育課程の編成についても学力向上とは切り離すことはできず、中央教育審議会の教育課程企画特別部会が出した「論点整理」においても、カリキュラムマネジメントの視点が重要であるとされています。その上で次期学習指導要領の改訂の趣旨を踏まえ、取り組む必要があります。

市内学校の状況及び検証結果をもとに、課題を明らかにし、その課題改善のため目標を設定して、組織的に取り組むことが、学校の学力向上につながるものと捉え、新たな提言としました。

②提言実現のための具体的取組

- i) 学力向上について取り組む組織を校務分掌上に位置付け、組織を機能させる。
- ii) 学力向上に向けた課題解決のために、教育課程の編成等具体的な取組を設定し、その検証を行う。

③提言の検証の視点について

- i) 学力向上について取り組む組織を校務分掌上に位置付け、組織を機能させる。
 - ・学力向上に取り組む組織を校務分掌上に位置付け、機能的な組織になっている。
 - ・学力向上の方向性について全教職員で共有する組織的な取組が行われている。
 - ・学力向上に関する全体での会議及び研修が年間で計画され、複数回行われている。
- ii) 学力向上に向けた課題解決のために、教育課程の編成等、具体的な取組を設定し、その検証を行う。
 - ・学習状況調査を活用し、学力に関する課題を明らかにしている。
 - ・学力向上に向けた課題解決につながる教育課程の編成等、具体的な取組が行われている。
 - ・学力向上の具体的な取組に対して、明確な目標指標を設定し、検証を行っている。

提言2 指導力の向上を図るために、校内研究を充実させます。

①提言設定の理由：

10 の提言の検証の結果から、学力向上と各学校で取り組んでいる校内研究は関連しているということが明らかとなりました。特に中長期的に取り組む、研究推進の方法が定着し、自校の研究体制を確立している学校では、学力向上に成果が見られました。横須賀市ではすべての学校が校内研究に取り組んでいますが、学校によってその研究への姿勢や体制には差が見られます。市内の学校において校内研究を充実させることは、教員の指導力を向上させ、その結果として学力向上につながると考え、新たな提言としました。

②提言実現のための具体的取組

- i) 研究推進委員会を中心とし、校内研究を学校全体での組織的な取組とする。
- ii) 研究テーマに対して、テーマ達成のための具体的方策を設定し、研究を推進する。
- iii) 研究協議会の持ち方を工夫し、研究協議を日常の授業改善につなげる。

③提言の検証の視点について

- i) 研究推進委員会を中心とし、校内研究を学校全体での組織的な取組とする。
 - ・研究推進委員会が定期的に関われ、研究の方向性が学校全体で共有されている。
 - ・学力向上の取組と校内研究が関連している。
- ii) 研究テーマに対して、テーマ達成のための具体的方策を設定し、研究を推進する。
 - ・研究テーマを実現するための具体的な手立てが設定されている。
 - ・具体的な手立てが研究授業の中でしっかりと位置付けられ、実践されている。
- iii) 研究協議会の持ち方を工夫し、研究協議を日常の授業改善につなげる。
 - ・研究協議会の持ち方を工夫している。
 - ・研究授業における成果と課題が明らかとなる研究協議が行われている。
 - ・研究協議会で明らかになった課題に対する解決策を日常の授業につなげている。

3

提言3 学習内容を定着させるために、目標と指導と評価が一体となった授業づくりを行います。

①提言設定の理由：

10 の提言の検証の結果とともに、教育委員会内において市内学校の学力向上について検証・分析した際に、学習状況調査の結果から、小学校低学年から、学習内容の定着という部分に課題があるということが明らかとなりました。その課題の要因の一つとして、指導者によって学習指導要領の内容についての理解に差があり、児童生徒にどんな力を身に付けさせる必要があるかということが明確でない中で授業が行われていることが少なくないと考えられます。また、児童生徒が学習したことを適切に評価がされているかという部分にも課題があります。教育委員会では、それらの課題に対して、学校に向けて、『「確かな学力」を育成する授業づくりのための視点』を示しています。各学校においては、その視点に沿った取組が実践されてきていますが、未だ定着が図られているとは言えません。そうした課題を踏まえ、提言3について授業づくりを視点とした新たな提言としました。

②提言実現のための具体的取組

- i) 学習指導要領をもとに各教科のねらいを理解している。
- ii) 『「確かな学力」を育成する授業づくりのための視点』を徹底する。

③提言の検証の視点について

- i) 学習指導要領をもとに各教科のねらいを理解している。
 - ・各時間において設定した目標が、学習指導要領の内容に沿ったものとなっている。
 - ・本時略案において、目標と指導と評価が一体となった授業構成となっている。
- ii) 『「確かな学力」を育成する授業づくりのための視点』を徹底する。
 - ・授業づくりのための視点の項目が実践されている。

※『「確かな学力」を育成する授業づくりのための視点』で示している項目を参照

提言の関係性について

平成 28 年度学力向上推進委員会から、「提言に沿った取り組みを行う中で、教員が授業に向き合うための具体的方策について」の諮問に対して、次のような答申をいただきました。

①学力向上推進委員会の意見

- ・提言に沿った取り組みを行う上では、提言 1 に示される教育課程の編成が重要であるということ。
- ・一方でその教育課程の編成について、学校においては改善の必要性があり、その具体的な視点について（単元配列だけでなく、単元目標や学習内容、評価の視点、配当時間等）示していく必要があること。
- ・3つの提言の関係性を示し、その3つの提言がどのような構図となっているかを理解することによって、授業づくりの視点を深める必要があること。（一時間の授業が教育課程の上でどのような位置づけであるのかということを理解することにより、授業づくりが深まるということ）
- ・提言の構図を踏まえ、授業づくりの具体として提言 3 に関わる資料を示すことが、教員一人一人の授業力を向上させることにつながるということ。

②諮問に対する答申

- （i）提言に沿った取り組みを行う中で、授業づくりを深めるために、提言の構図を示し、学力向上の提言の理解を図る。
- （ii）授業に向き合うために、提言 3 を進めるための資料を作成し、学校に示すことで、授業力の向上につながる。

以上の視点をもとに、資料を作成し、教員に提示するとともに、資料をもとにして教育委員会が一体となって、授業に対する指導助言を行い、授業づくりの視点を徹底することによって、教員が授業に向き合い、授業力を向上させることによって、学力が向上する。

この答申に従って、提言の関係性を示した構図と授業づくりの視点となる資料を作成しました。

学力向上に向けた学校が取り組むべき3つの提言

平成28年度 学力向上推進委員会

提言1 学力向上に向けた課題解決のために、教育課程を編成し、組織的に取り組みます。

学力向上に向けた課題解決のための教育課程を編成するには、各学校の課題を明らかにし、その課題解決に向けて小学校6年間、中学校3年間を見直し、各教科等についてどのように指導を行っていくか計画を立てます。さらに、その計画の実施に向けて、時間数等の確保の観点から、年間行事予定や日課表といった点についても検討を行う必要があります。そして、全職員で共有することが重要となります。

- 1 学力向上に取り組む組織を校務分掌上に位置付け、組織を機能させる。
- 2 学力向上に向けた課題解決のために、教育課程の編成等具体的な取組を設定し、その検証を行う。

【教育課程編成の視点】

- ① 自校の児童生徒の学習状況等をもとに課題を明確にする。
- ② 課題解決のための重点目標及び目標達成のための手立てを設定する。
- ③ 重点目標を達成するための各教科等横断的な視点での年間指導計画を作成する。
- ④ 年間指導計画に合わせ、評価計画を作成する。
- ⑤ 実施後に、指導計画や評価計画を見直し、次年度につなげる。

年間指導計画は、単元配列だけではなく、単元目標や評価の視点、教材名、時間数等を明示します。そして、子どもの実態に即して更新していくことが大切です。

提言2 指導力の向上を図るために、校内研究を充実させます。

校内研究を充実させるためには、次の視点が大切です。

- 1 研究推進委員会が中心となり、校内研究を学校全体での組織的な取組とする。
- 2 研究テーマの設定理由を全教職員で共有し、テーマ達成のための具体的方策を定め、研究を推進する。
- 3 研究協議会の持ち方を工夫し、協議の内容を日常の授業改善につなげる。

提言3 学習内容を定着させるために、目標と指導と評価が一体となった授業づくりを行います。

「確かな学力を育成するための授業づくりの視点」(裏面)が参考にとなります。適切な学習評価を行うことにより、自身の授業を振り返り、授業改善の視点を見出すことができます。

基本 主体的な学びを促す環境をつくる。

- 1 単元目標、本時目標等を明確に持つ。
- 2 目標の達成に向けた手立てを設定する。
- 3 目標の達成状況を適切に把握するために振り返りをする。

学校が取り組むべき3つの提言では、提言1の「教育課程の編成」が全ての土台となります。提言2の「校内研究」、提言3の「目標と指導と評価が一体となった授業づくり」は、各校の児童生徒の実態をもとにした学校教育目標と、その学校教育目標を実現するための「教育課程」をもとに取り組まれるものだからです。

確かな学力を育成する授業づくりのための視点

「基本」 主体的な学びを促す環境をつくる

- 視点 1 単元目標、本時目標等を明確に持つ
- 視点 2 目標の達成に向けた手立てを設定する
- 視点 3 目標の達成状況を適切に把握するために振り返りをする

*目標＝（めあて・ねらい）

ポイント

基本 主体的な学びを促す環境をつくる

- ・学習規律や学習用具等について、学校体制で共通理解を図り、指導を徹底する。
- ・子どもたちの主体的な学びにつなげるために、授業全体の見通しをもって、授業に臨む。
- ・一人一人を大切に作る雰囲気や正しくあたたかい言語環境になるような学習集団を育成する。

視点 1 単元目標、本時目標等を明確に持つ

- ・学習指導要領を根拠に目標（本時でどんな力を身に付けさせたいのか）及び目標の達成状況を明確にし、評価計画を立てる。
- ・目標に即しながら、「やってみたい、考えてみたい」という興味・関心を高めるような学習課題を子どもから引き出したり、教師側から設定したりする。
- ・子どもたちが学習の見通し（何ができるようになるか等）を明確に持つための工夫をする。

視点 2 目標の達成に向けた手立てを設定する

- ・教科書を含め、子どもたちの実態を踏まえて、適切な教材、資料を用いる。
- ・子どもたちの実態を踏まえて、適切な学習活動を設定する。
- ・個人、ペア、グループ活動等、適切な学習形態を設定する。
- ・主体的・対話的で深い学びの視点を意図的に取り入れる。

視点 3 目標の達成状況を適切に把握するために振り返りをする

- ・目標に基づいて、子ども自身が本時で学んだことを振り返ったり、確認したりする時間を設定する。
- ・振り返りの中で、次の授業の学習問題につなげたり、見通しを持たせたりする。
- ・学習活動に取り組んでいる場面での「見取り」とともに、取り組ませたワークシート・作品等を回収し、授業後に学習状況の把握をし、適切な評価をする。そして、その評価結果を次時に生かす。
- ・学習評価を行う中で、自身の授業について振り返り、授業改善につなげる。

教師自身が授業を振り返る機会を持ちましょう

また、目標と指導と評価が一体となった授業づくりを追求していくためには、授業後の子どもたちの状況を把握すること（評価）をもとに、授業を振り返る機会を設け、自分の授業への課題意識を持ち、授業改善に取り組む必要があります。授業を振り返ることが、次の授業づくりのスタートになります。

授業の振り返り項目（例）

★学習意欲が高まる環境をつくっていますか？

- ☐ 授業に臨む時の基本的な習慣（学習用具等の準備、話を聞く姿勢や発言の方法等）を身に付けさせ、適切な対応をしている。
- ☐ 見通しをもった授業計画（時間、学習内容等）で授業に臨んでいる。
- ☐ 一人一人を大切に作る雰囲気や正しくあたたかい言語環境になるような工夫をしている。

★単元目標、本時目標等を明確に持っていますか？

- ☐ 学習指導要領を根拠に、「どんな力を身に付けさせたいのか」ということを明確にした目標が立てられている。
- ☐ 本時の学習への興味関心が高まるような動機付けをしながら、目標に即した学習課題を設定している。
- ☐ 子どもたちが目標（めあて・ねらい）や学習の見通しを持てるような工夫（視覚化等）をしている。

★目標の達成に向けた手立てを設定していますか？

- ☐ 子どもたちの実態を考慮して、教材・資料を準備している。
- ☐ 目標の実現に向けて、教材・資料を活用して適切な学習活動を設定している。
- ☐ 学習活動に合わせ、意図的に学習形態を工夫している
- ☐ 子どもたちに向けてわかりやすい発問を行っている。
- ☐ 学習や思考の流れがわかる板書を行っている。

★目標の達成状況を適切に把握するための手立てをとっていますか？

- ☐ 本時の学習内容について、児童生徒自身が「何がわかったか」「どこがわからなかったのか」を個別に自覚できる振り返りを行っている。
- ☐ 本時の学習内容について確かめる（定着を図る）場面を設定している。
- ☐ 学習活動に取り組む場面の見取りを記録したり、取り組んだワークシートなどを回収したりするなど、本時の学習状況を把握する手立てをとっている。
- ☐ 個々の学習状況を把握した後に、次の手立てを講じたり、次時の学習につなげたりしている。
- ☐ 学習評価を行う中で、自身の授業の課題を明確にし、課題解決する手立てをとり、授業改善につなげている。